

個人投資家の新たな8分類とその実態

わが国の個人投資家を投資に対する考え方・行動特性で分けると、大きく8つのタイプに分類されることが判明した。従来、証券会社の顧客の中心であった「リスク志向タイプ」「保守的運用タイプ」の他に、近年は「長期分散積立タイプ」「周りに迎合タイプ」も存在感を増してきている。

アンケート調査で判明した 8つの投資家タイプ

野村総合研究所は、2021年8月～9月に、資産運用の次世代を担う全国の45歳～55歳の男女個人約1万人を対象にWebアンケート調査を実施した。同調査では、投資家の投資スタイル（投資頻度・投資対象商品等）や投資に対する考え方を検証した。さらに、昨今のニーズ変化を体現している投資家11名にインタビューし、その投資意識・行動の真意を尋ねた。

アンケート調査では、投資に対する考え方・行動特性を示した選択肢について、どの程度自分に当てはまるかを回答してもらった。その回答結果に対して主成分分析を実施することで、図表の①～⑦に記載した7つの成分が抽出された¹⁾。さらに、抽出された成分を用いてk-means法によるクラスター分析を実施して投資家を分類すると、下表A～Hの8つのタイプに分けられた²⁾。表中の数値は、A～Hの各投資家タイプに①～⑦の意識・行動特性がどの程度当てはまるかを表している。

本稿では、8つの投資家タイプの中で、新旧それぞれ特徴的なタイプの投資家をいくつか紹介したい。

新たな投資家タイプの出現

まず、比較的新しい投資家タイプの「A. 長期分散タイプ」「C. 周りに迎合タイプ」についてみていきたい。

「A. 長期分散積立タイプ」は、最近投資を始めた人が多く、長期間の運用を前提に、NISA・確定拠出年金等の税優遇制度を活用しながら運用しているセグメントである。年金や医療保険など老後の生活に関心が高まる中で資産形成の必要性を感じ、投資を始めた人が多い。

本タイプは、インターネットやSNSを中心に情報収集するという特徴もあり、たまたまYouTubeで投資関連の動画を観たことで興味を持って投資を始めた人もいる。

彼らは、従来の投資家と異なり、運用商品の短期的な騰落に醍醐味を感じず、「退屈な投資が一番」と考えている。金融機関の担当者への期待も少なく、「YouTubeは無料なのに、わざわざ手数料を払って証券会社の話を

図表 8つの投資家タイプ³⁾

投資に対する考え方・行動特性	新しい投資家タイプ				古くからの投資家タイプ			
	A. 長期分散積立タイプ (10%)	B. 合理的使い分けタイプ (13%)	C. 周りに迎合タイプ (19%)	D. コツコツ運用タイプ (12%)	E. 銘柄研究タイプ (12%)	F. リスク志向タイプ (8%)	G. 無関心タイプ (13%)	H. 保守的運用タイプ (14%)
① 勉強好き ・経済・金融経営等、社会勉強のために投資 ・ビジネスパーソンとしての社会勉強として投資	-0.69	1.08	0.14	0.11	1.09	-0.19	-1.13	-0.52
② 受け身 ・勤務先の制度（従業員持株会など）で運用 ・同僚・友人などを参考に、同じような商品に投資	-0.61	1.70	0.72	-0.49	-0.63	-0.65	-0.45	-0.36
③ 安定志向・長期目線 ・長期目線での分散投資を意識 ・インカムゲインを重視	0.73	0.05	-0.45	0.55	0.06	-0.50	-1.24	0.98
④ 株好き ・今後成長が期待できる企業の株式に投資 ・値上がり期待できる銘柄を探すのが楽しい	-0.55	0.89	0.04	-0.03	0.98	0.13	-1.23	-0.22
⑤ 税優遇重視 ・NISA・確定拠出年金（iDeCo）などを活用	1.19	1.00	0.17	0.33	-0.03	-0.60	-0.96	-0.93
⑥ 学資目的 ・子供・孫の教育費のために運用	-0.68	1.21	0.17	1.22	-0.32	-0.38	-0.73	-0.68
⑦ ボラティリティ重視 ・日々値動きが大きい方が楽しい ・ハイリターンが期待できる運用を好む	-0.57	0.75	0.01	-0.36	0.40	1.69	-0.87	-0.51

NOTE

- 1) 投資に対する意識・行動特性を示した21個の項目について、どの程度自分に当てはまるかを4段階で回答してもらった(1:当てはまらない、2:あまり当てはまらない、3:やや当てはまる、4:当てはまる)。その回答結果に対して主成分分析を実施することで、主要な成分を7つ抽出し、それぞれが表す投資家の考え方・行動特性を解釈して名付けた。
- 2) 上記で抽出された7つの成分の主成分得点を用いてk-means法によるクラスター分析を実施し、アンケート回答者を8つの投資家タイプに分類した。各クラスターの特徴を解釈し、投資家タイプを名付けた。
- 3) 図表の数値は、各クラスター(8つの投資家タイプ)の中心点を示しており、各投資家タイプに①～⑦の意識・行動特性がどの程度当てはまるかを表している。表頭の括弧内の数値は、全投資家に占める各投資家タイプの人数割合を示す。A～Hの投資家タイプは、投資経験年数が10年未満の人の割合が高い順(新しい順)に左から並べている。
- 4) インタビューによる。

聞く必要があるのか」とインタビューに答えている。

「C. 周りに迎合タイプ」は、投資人口が増える中で、「周りの同僚・友人たちが投資を始めたから」という理由で投資を始めた人が多い。投資の目的が「老後の資金を貯めるため」である人が80% (全体：70%) と多く、彼らも老後の生活への不安が背景にあることが窺える。

このタイプは、企業型確定拠出年金や従業員持ち株会等、勤務先の制度を活用して最低限の金額だけ投資をしているケースが多い。取引頻度が月に1回未満である割合が56% (全体：53%)、求める利回りが5%未満の人が54% (全体：50%) と、投資行動も控えめである。

「A. 長期分散積立タイプ」「C. 周りに迎合タイプ」は、10数年前までは目立たない存在であったが、各種税制の整備やデジタルを活用した投資手法の普及等に後押しされ、近年存在感が増してきている。

古くからの投資家タイプにおけるニーズ変化

次に、従来、証券会社の中心顧客であった「F. リスク志向タイプ」「H. 保守的運用タイプ」の特徴をみる。

「F. リスク志向タイプ」は、株式を中心に運用し、かつてはキャピタルゲインを求めていた投資家である。今でも週に1回以上取引する人が31% (全体：15%) と取引頻度が高い。

一方で、彼らの中にはかつてのアグレッシブさを保ちながらも、堅調な株式市況を背景に安定運用にシフトしている投資家もいる。昔から「とにかく儲けたい」という思いを持つが、上昇基調にある株式市場の中、インデックス型投資信託等でもある程度の利益が得られるため、長期・安定運用を中心としつつ、資産の一部に関心があ

る業界や魅力的な優待の株式に投資する投資家も多い⁴⁾。

「H. 保守的運用タイプ」は、取引経験は長いものの、最近は取引を控えているタイプの投資家である。

このタイプは、10～20年前に投資を開始した人が39% (全体：30%) と多いが、直近1年間で取引をしていない割合が33% (全体：24%) に上っている。ITバブル崩壊やリーマンショックにより、過去に「何となく」運用してきた資産が目減りする経験を持つ投資家である。

このタイプは、金融機関の担当者に求めることが「自分の資産や運用ニーズを理解してくれること」である人が81% (全体：68%) と多い。近年、上向きだが自分の経験則とは異なるマーケットの動きの中で、「どう動くべきか」についてアドバイスを欲している人が多い。

古くからの投資家タイプである「F. リスク志向タイプ」「H. 保守的運用タイプ」は、近年の市場環境の変容に伴い、投資行動を変化させていることが浮き彫りになった。

証券営業の役割の再定義

調査の結果、個人投資家のニーズが多様化するとともにそれが行動として顕在化し、また一部の投資家は、時代とともにニーズを変化させていることが分かった。

証券会社や銀行といった金融機関には、投資家ニーズの多様化・変化を捉えながら、顧客の最善の利益を実現する資産運用サポートを提供することが求められている。

Writer's Profile



西岡 広裕 Kosuke Nishioka

金融コンサルティング部
主任コンサルタント
専門は金融機関の経営戦略
focus@nri.co.jp